



TITLE:

対称ポテンシャル流の非安定性について (発展系と自由境界問題)

AUTHOR(S):

竹下, 彬

CITATION:

竹下, 彬. 対称ポテンシャル流の非安定性について (発展系と自由境界問題). 数理解析研究所講究録 1976, 264: 22-52

ISSUE DATE:

1976-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/105840>

RIGHT:

対称ポテンシャル流の非安定性について

名古屋大学 教養部数学教室

竹下 彬

[I] Summary

3次元ユークリッド空間に於ける同心球面間の領域に於ける定常 Navier-Stokes 方程式の解 $X^{(k)} = \alpha \text{grad}(\frac{-1}{r})$, $p^{(k)} = -\frac{1}{2} \alpha^2 r^{-4}$ の安定性を調べる。充分大なる α に対してこの k に対して此の解は不安定で、 $\alpha \rightarrow \lim_{k \rightarrow \infty} (\text{dimension of instability subspace of } X^{(k)}) = \infty$ である事を示す。

[II]. 3次元 Navier-Stokes 方程式及びそれに関する結果.

§ II-1 Navier-Stokes 方程式

E_3 を 3次元ユークリッド空間, (x_1, x_2, x_3) をそのデカルト座標系とする。 e_1, e_2, e_3 を夫々 x_1, x_2, x_3 軸に平行で各長さに於ける長さ α の E_3 に於けるベクトル場を表わすものとする。

Ω を E_3 の有界領域でその境界 $\partial\Omega$ は C^∞ -級であるとする。 $\mathcal{K}(\Omega)$ で Ω 上のベクトル場全体を表わす。

Ω に於ける Navier-Stokes 方程式は次の様に表わされる。

先ず非定常方程式は, $X = X(x, t); (x \in \Omega, t > 0)$ とし

$$(NSE) \quad \begin{cases} \frac{\partial X}{\partial t} = \nu \Delta X - \nabla_X X - \frac{1}{\rho} \text{grad } p + f(x, t), & \text{in } \Omega, t > 0 \\ \text{div } X = 0. \\ X(x, 0) = a(x) \\ X(x, t) \Big|_{x \in \partial\Omega} = b(x, t) \end{cases}$$

又、定常方程式は $X = X(x)$ ($x \in \Omega$) とし

$$(SE) \quad \begin{cases} \nu \Delta X - \nabla_X X = \text{grad } f + f(x) & \text{in } \Omega, \\ \text{div } X = 0 \\ X|_{\partial\Omega} = \theta(x) \end{cases}$$

で表わされる。但し、未知関数はベクトル場 X 、及び実数値関数 $f(x, t)$ (圧力) で、外力 $f(x, t)$ 、初期値ベクトル場 $a(x)$ 及び境界値 $\theta(x, t)$, $\theta(x)$ は既知項である。又 $X = \sum_{i=1}^3 X_i \cdot e_i$ とすると

$$\frac{\partial X}{\partial t} = \sum_{i=1}^3 \frac{\partial X_i}{\partial t} e_i, \quad \Delta X = \sum_{i=1}^3 \Delta X_i e_i = \sum_{i=1}^3 \left(\sum_{j=1}^3 \frac{\partial^2 X_i}{\partial x_j^2} \right) e_i,$$

$$\nabla_X X = \sum_{i=1}^3 \left(\sum_{j=1}^3 X_j \frac{\partial X_i}{\partial x_j} \right) e_i \quad (= (X \cdot \nabla) X \text{ と表わすことも可})$$

である。 ν, ρ は正の定数である。

既知項に対する適合条件としては $\text{div } X = 0$ より $\text{div } a = 0$ 、及び Gauss-Stokes の公式より直ちに従う

$$\int_{\partial\Omega} \theta(x) \cdot n(x) dS = 0$$

が課せられる。但し、 $n(x)$ は $\partial\Omega$ の unit exterior normal, dS は $\partial\Omega$ の面積要素とする。

(注1) 尚、後に問題の複素化を考える迄は全ての量は実数の範囲で考える。即ち、実数値関数、実ベクトル場等々。

(注2) 記号に関する約束としてベクトル量に関する記号は以後全て肉大文字で表わす事にする。 X, Y, L^2, H 等。

§ II-2. 幾つかの関数空間及び作用素.

$C_0^{\infty} \equiv C_0^{\infty}(\Omega)$ で C^{∞} 級のベクトル場 $\Phi(x) \in \mathfrak{X}(\Omega)$ で

$\text{supp}(\Phi)$ が G で compact かつ $\text{div} \Phi \equiv 0$ となるものの全体を表わす。 $L^2 \equiv L^2(\Omega)$ で可測なベクトル場 $X = \sum_{i=1}^3 X_i e_i \in \mathfrak{X}(\Omega)$

で $\|X\|^2 = \int_{\Omega} \sum_{i=1}^3 X_i(x)^2 dx < \infty$ となるものの全体とする

Hilbert space を表わす。 その内積を (\cdot, \cdot) で表わす。

$$(X, Y) = \sum_{i=1}^3 \int_{\Omega} X_i(x) Y_i(x) dx.$$

$C_0^{\infty} \subset L^2$ であるが L^2 のノルムに関する C_0^{∞} の closure を

$L_{\sigma}^2 \equiv L_{\sigma}^2(\Omega)$ で表わし, その L^2 に於ける直交補空間を $L_{\pi}^2 \equiv$

$L_{\pi}^2(\Omega)$ で表わす。 この時次の補題が成り立つ。

補題 1

(1) $X \in L^2(\Omega)$ が $X \in L_{\sigma}^2$ である為の必要かつ十分条件は

$$\text{div} X = 0 \text{ in } \Omega \text{ (distribution sense)}$$

及び $H^{-\frac{1}{2}}(\partial\Omega)$ の意味で $\text{normal component of } X|_{\partial\Omega} \equiv 0$ on $\partial\Omega$ である。

(2) $X \in L^2(\Omega)$ が $X \in L_{\pi}^2$ である為の必要かつ十分条件は

scalar function $f = f(x)$ で $f \in L^2_{loc}(\Omega)$, $\frac{\partial f}{\partial x_i} \in L^2(\Omega)$, $i=1,2,3$
 であるものが存在し $X = \text{grad } f$ が成立する事である。

L^2 より L^2_σ 及び L^2_π 上への直交射影を夫々 P_σ 及び P_π
 で表わす。 $W^m \equiv W^m(\Omega) \equiv \{X = \sum_{i=1}^3 X_i(x) e_i \in \mathcal{X}(\Omega); X_i \in V^m(\Omega)\}$,
 $H^m \equiv H^m(\Omega) \equiv \{X = \sum_{i=1}^3 X_i(x) e_i \in \mathcal{X}(\Omega), X_i \in H^m(\Omega)\}$ とし
 $X \in W^2 \cap H^1 \cap L^2_\sigma \equiv \mathcal{D}(A)$ に対し

$$AX = -P_\sigma \Delta X$$

とおくと $A: \mathcal{D}(A) \rightarrow L^2_\sigma$ は strictly positive self-adjoint
 operator となる。

此の作用素 A は Stokes operator と呼ばれる。

§ II-3 Navier-Stokes 方程式の解の存在と一意性に関して
 知られている結果。

Navier-Stokes 方程式に於いて境界値 $g(x, t)$, $g(x)$ の Q の
 内部への divergence free の extension $c(x, t)$, $c(x)$ とすると
 (NSE) , (SE) は夫々次の方程式 (NSE') , (SE') に帰着される。

$$(NSE') \quad \begin{cases} \frac{dX}{dt} = -AX - P_\sigma[(X \cdot \nabla)X + (c \cdot \nabla)X + (X \cdot \nabla)c] + P_\sigma(f - (c \cdot \nabla)c) - A c - P_\sigma \frac{dc}{dt} \\ X(0) = a \end{cases}$$

$$(SE') \quad AX + P_\sigma[(X \cdot \nabla)X + (c \cdot \nabla)X + (X \cdot \nabla)c] - P_\sigma(f - (c \cdot \nabla)c) + A c$$

方程式 (NSE') の解の存在と一意性の同じ結果を得る。

定理 (正則解の局所的な存在及び一意性) f, g は共に C^∞ -級とする。このとき注意の $a \in \mathcal{D}(A^{\frac{1}{4}})$ に対して $T > 0$ が存在し $X(t) \in C([0, T]; \mathcal{D}(A^{\frac{1}{4}})) \cap C((0, T]; \mathcal{D}(A)) \cap C^1((0, T); L^2) \equiv \mathcal{W}$ が存在し方程式 (NSE') を満たす。又此の方程式の解は \mathcal{W} で unique である。

定理 (E. Hott の弱解の大域的な存在) f, g は共に C^∞ -級とする。此時注意の $a \in L^2_\sigma$ に対して

$X(t) \in C([0, \infty); L^2_\sigma) \cap L^2_{loc}((0, \infty); \mathcal{D}(A^{\frac{1}{2}}))$ が存在し注意の $\varphi(x, t) \in C^{0, \infty}_\sigma([0, \infty) \times \Omega)$ に対して等式

$$\begin{aligned} (a, \varphi(0)) + \int_0^\infty (X, \frac{d\varphi}{dt}) dt &= \int_0^\infty (A^{\frac{1}{2}} X, A^{\frac{1}{2}} \varphi) + \int_0^\infty \int_\Omega \sum_{i,j=1}^3 \frac{\partial X_i}{\partial x_j} X_j \varphi_i dx dt \\ &\quad + \int_0^\infty ((c \cdot \nabla) X + (X \cdot \nabla) c + (c \cdot \nabla) c - f + A c + \frac{dc}{dt}, \varphi) dt \end{aligned}$$

を満たす。但し、 $C^{0, \infty}_\sigma([0, \infty) \times \Omega)$ は $\varphi = \varphi(x, t) = \sum_{i=1}^3 \varphi_i(x, t) e_i$ で $\varphi_i(x, t) \in C^{0, \infty}([0, \infty) \times \Omega)$, $i=1, 2, 3$ かつ $\operatorname{div} \varphi = 0$ となるものの全体からなる集合とする。

[III] Sattinger の結果.

此處に D.H. Sattinger の論文, The Mathematical Problem of Hydrodynamic Stability, (Journal of Mathematics and Mechanics, Vol. 19, No. 9 (1970), pp. 797-817) から後、議論の背景となる部分の結果を述べる。

$X^{(0)} = X^{(0)}(x)$ を定常方程式 (SE) の解とする。此の解が安定であるか否かは非定常方程式 (NSE) に於いて初期値を $a(x) = X^{(0)} + X^{(1)}$ で与えた時の解を $X^{(0)}(x) + X(x, t)$ とすると $X(x, t)$ が t と共に減衰するか否かである。 $X(x, t)$ の境界値が零である事を考慮すると、これは発展方程式

$$(EE) \begin{cases} \frac{dX}{dt} = -AX - P_0[(X \cdot \nabla)X + (X^{(0)} \cdot \nabla)X + (X \cdot \nabla)X^{(0)}] \\ X(0) = X^{(1)} \end{cases}$$

の解を調べる事になる。これを $X=0$ のまわりで線型化すると

$$(LEE) \begin{cases} \frac{dX}{dt} = -AX - P_0[(X^{(0)} \cdot \nabla)X + (X \cdot \nabla)X^{(0)}] \\ X(0) = X^{(1)} \end{cases}$$

が得られる。 $\varphi \in \mathcal{D}(A)$ に対して

$$L\varphi = -A\varphi - P_0[(X^{(0)} \cdot \nabla)\varphi + (\varphi \cdot \nabla)X^{(0)}]$$

とおく。此の作用素 L は一般に self-adjoint ではない。

そこで問題を複素化する。これまでに述べた関数空間、作用素等必要に応じて修正を行うとして今迄通りの記号で用いる。

補題 (Sattinger)

- (1) L のスペクトルは有限多重度の実スペクトルのみより成り
 ∞ 以外に集積しない。
 (2) L のスペクトルは複素平面で右に凸な或は放物線の内部に
 含まれる。
 (3) L の generalized eigen space は $\mathcal{D}(A^{1/2})$ (graph topology を与える)
 で complete である。

次に非安定性の定義を述べる。(注: 実の範囲である)

定義 定常解 $X^{(0)}$ が非安定であるとは $\varepsilon_0 > 0$ が存在して
 任意の $\delta > 0$ に対し、次の (i) (ii) を満たす $X^{(1)}$ が存在する事である。
 (i) $X^{(1)} \in L^2_\sigma$ かつ $\|X^{(1)}\|_{L^2_\sigma} < \delta$
 (ii) $X^{(1)}$ を初期値とする (EE) の Hopf solution が存在して
 或る $t_0 > 0$ に対して $\|X(\cdot, t_0)\|_{L^2_\sigma} > \varepsilon_0$ 。

定理 (Sattinger) $X^{(0)}$ は定常 Navier-Stokes 方程式の解と
 し、 L の固有値 λ で $\operatorname{Re} \lambda > 0$ となるものが少なくとも一つ存在
 するとする。此の時 $X^{(0)}$ は非安定である。

此処で後の議論の為に次の定義をしておく。

定義 $\lambda \in \sigma(L)$ (spectrum of L) に対して λ の generalized
 eigen space を $\Pi(\lambda)$ とし、 $W = \bigoplus_{\substack{\lambda \in \sigma(L) \\ \operatorname{Re} \lambda > 0}} W(\lambda)$ において $X^{(0)}$ の
 unstable subspace と呼ぶ。

[IV] 問題とその対称性.

§ IV-1. 問題の設定 $\Omega = \{x \in E_3; r_1 < |x| < r_2\}$ とおく. 任意の $\alpha \in \mathbb{R}$ に対し $X^{(\alpha)} = \alpha \operatorname{grad}(\frac{1}{r})$, $p^{(\alpha)} = 2\rho\alpha^2 \int_r^{\cdot} s^{-5} ds$ とおく. 但し, $r = |x|$. 此の $X^{(\alpha)}, p^{(\alpha)}$ は次の Navier-Stokes 方程式

$$(SE_\alpha) \begin{cases} \nu \Delta X - \nabla_X X - \frac{1}{\rho} \operatorname{grad} p = 0 \\ \operatorname{div} X = 0 \\ X|_{\partial G} = X^{(\alpha)}|_{\partial G} \end{cases}$$

の解となっている. 此の解の安定性を調べるが, 即ち $unstable\ subspace \neq \{0\}$ かどうか調べるのが本稿の目的である.

以後 $X^{(\alpha)} = \alpha \operatorname{grad}(\frac{1}{r})$ を対称ポテンシャル流と呼ぶ事にする.

§ IV-2. 対称性

此处では先に設定した問題の持つ対称性について述べる. 以後本稿を通して G で 3 次元回転群を表わす事にする.

E_3 のデカルト座標系 (x_1, x_2, x_3) を固定して, $G \cong SO(3; \mathbb{R})$ と同一視し, 又 G の Euler 角を $(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$ とする. G は Ω に等長変換群として作用している. $\mathcal{F}(\Omega)$ を Ω 上の関数の全体とする時, 各 $g \in G, X \in \mathcal{X}(\Omega), p \in \mathcal{F}(\Omega)$ に対し線型作用素

$$U_g: \mathcal{X}(\Omega) \longrightarrow \mathcal{X}(\Omega), U_g: \mathcal{F}(\Omega) \longrightarrow \mathcal{F}(\Omega)$$

を $(U_g X)(x) = g(X(g^{-1}x)), (U_g \varphi)(x) = \varphi(g^{-1}x)$ で定義する。

但し $g(X(g^{-1}x))$ は $X(g^{-1}x)$ を基底や E_3 の基底と一致する様に平行移動して E_3 のベクトルと見てこれに g を作用させるとする。
 U_g は Ω の等長変換 g が Ω 上のベクトル場に着る起る変換である。 g の等長性により U_g は $L^2(\Omega), L^2(\Omega)$ に於ける G のユニタリ表現を与える。

次の定義を設ける。

定義 写像 (linear or nonlinear) $A: \mathcal{X}(\Omega) \rightarrow \mathcal{X}(\Omega),$

$B: \mathcal{X}(\Omega) \rightarrow \mathcal{F}(\Omega), C: \mathcal{F}(\Omega) \rightarrow \mathcal{X}(\Omega), D: \mathcal{X}(\Omega) \times \mathcal{F}(\Omega) \rightarrow \mathcal{X}(\Omega)$

が G -invariant であるとは任意の $g \in G$ に対し

$$\begin{array}{ccccc} \mathcal{X}(\Omega) & \xrightarrow{A} & \mathcal{X}(\Omega) & , & \mathcal{X}(\Omega) \xrightarrow{B} \mathcal{F}(\Omega) & , & \mathcal{F}(\Omega) \xrightarrow{C} \mathcal{X}(\Omega) \\ \downarrow U_g & & \downarrow U_g & & \downarrow U_g & & \downarrow U_g \\ \mathcal{X}(\Omega) & \xrightarrow{A} & \mathcal{X}(\Omega) & & \mathcal{X}(\Omega) \xrightarrow{B} \mathcal{F}(\Omega) & & \mathcal{F}(\Omega) \xrightarrow{C} \mathcal{X}(\Omega) \end{array}$$

$$\begin{array}{ccc} \mathcal{X}(\Omega) \times \mathcal{F}(\Omega) & \xrightarrow{D} & \mathcal{X}(\Omega) \\ \downarrow U_g \times U_g & & \downarrow U_g \\ \mathcal{X}(\Omega) \times \mathcal{F}(\Omega) & \xrightarrow{D} & \mathcal{X}(\Omega) \end{array}$$

が可換となる事である。

次に Navier-Stokes 方程式の各項を与える写像の G -invariance を確認しておく。それには各写像の coordinate free な表現を見ればよい。 $\frac{\partial}{\partial t}$ 及び g の等長性より, grad, div 及び $\Delta \stackrel{\text{Def}}{=} \text{grad} \cdot \text{div} - \text{rot} \cdot \text{rot}$ については殆んど自明である。

又 ∇ についてはそれが E_3 の Riemann 計量 $ds^2 = dx_1^2 + dx_2^2 + dx_3^2$ により決まる Riemannian connection である事により ∇ は G -invariant である。又 $X^{(k)} = \alpha \text{grad}(\frac{1}{r})$ の G -invariance (i.e. $U_g X^{(k)} = X^{(k)}$ for $g \in G$) より ∇ の線型写像 $X \mapsto \nabla_{X^{(k)}} X$ 及び $X \mapsto \nabla_X X^{(k)}$ は共に G -invariant である。

故に此の場合の Navier-Stokes 方程式は G -invariant equation であり, G -invariant flow $X^{(k)}$ のまわりの線型化した方程式も G -invariant equation である。その固有値問題を G のユニタリ表現論の結果を援用して調べるのが本稿の以後の program である。

[V] G のユニタリ表現

此处では G のユニタリ表現に因りて以後用いるものを I. M. Gel'fand, R. A. Minlos and Z. Ya. Shapiro; Representations of the rotation and Lorentz groups and their applications, Pergamon Press, 1963 より引用する。

先の様に E_3 にデカルト座標系 (x_1, x_2, x_3) を固定し G を $SO(3; \mathbb{R})$ と同一視し、又 Euler 角を $(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$ とすると、Euler 角 $(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$ を持つ $g = g(\varphi_1, \theta, \varphi_2) \in G$ には matrix

$$T_g = T(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = \begin{bmatrix} \cos \varphi_1 \cos \varphi_2 - \sin \varphi_1 \cos \theta \sin \varphi_2 & -\cos \varphi_1 \sin \varphi_2 - \sin \varphi_1 \cos \theta \cos \varphi_2 & \sin \varphi_1 \sin \theta \\ \sin \varphi_1 \cos \varphi_2 + \cos \varphi_1 \cos \theta \sin \varphi_2 & -\sin \varphi_1 \sin \varphi_2 + \cos \varphi_1 \cos \theta \cos \varphi_2 & -\cos \varphi_1 \sin \theta \\ \sin \theta \sin \varphi_2 & \sin \theta \cos \varphi_2 & \cos \theta \end{bmatrix}$$

が対応する。又 $T_g^{-1} = T_g^{-1} = T(\pi - \varphi_2, \theta, \pi - \varphi_1)$ が成り立つ。

G の既約ユニタリ表現は weight l が $l = 0, \frac{1}{2}, 1, \frac{3}{2}, \dots$ であるもので尽される。

x_j ($j=1, 2, 3$) 軸のまわりの回転に対応する表現の生成演算素を A_j とし $H_j = iA_j$, $H_{\pm} = H_1 \pm iH_2$ とし又 weight l の既約表現の canonical basis を $\{f_{-l}^l, f_{-l+1}^l, \dots, f_l^l\}$ とすると

$$H_+ f_m^l = \alpha_{m+1}^l f_{m+1}^l, H_- f_m^l = \alpha_m^l f_{m-1}^l, H_3 f_m^l = m f_m^l,$$

但し $\alpha_m^l = \sqrt{(l+m)(l-m+1)}$, が成り立つ。

又 $H^2 \equiv H_1^2 + H_2^2 + H_3^2$ とおくと

$$H^2 f_m^l = l(l+1) f_m^l$$

が成り立つ。

ユニタリ表現 $U_g: L^2(S^2) \rightarrow L^2(S^2)$ は integral weight l の既約表現の直和に分解される。此の時 (ϑ, φ) を 2次元球面 S^2 の極座標として, H_{\pm}, H_3, H^2 は

$$H_{\pm} = e^{\pm i\varphi} \left(\pm \frac{\partial}{\partial \vartheta} + i \cot \vartheta \frac{\partial}{\partial \varphi} \right), H_3 = -i \frac{\partial}{\partial \varphi}$$

$$-H^2 = \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \vartheta} \left(\sin \vartheta \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) + \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2}$$

で与えられる。

又 weight l の既約表現の canonical basis は 球関数 $\{Y_l^m(\vartheta, \varphi); m = -l, -l+1, \dots, l-1, l\}$ で与えられる。

$$Y_l^m(\vartheta, \varphi) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-im\varphi} P_l^m(\cos \vartheta),$$

$$P_l^m(\mu) = \sqrt{\frac{(l+m)!}{(l-m)!}} \sqrt{\frac{2l+1}{2}} \frac{1}{2^l l!} (1-\mu^2)^{-\frac{m}{2}} \frac{d^{l-m}}{d\mu^{l-m}} (1-\mu^2)^l$$

である。

weight l の既約表現の canonical basis を与える U_g
 $(g = g(\varphi_1, \theta, \varphi_2))$ の matrix を $T = T(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = \begin{bmatrix} T_{-l, -l}^l & \cdots & T_{-l, l}^l \\ T_{-l+1, -l}^l & & T_{-l+1, l}^l \\ \vdots & & \vdots \\ T_{l, -l}^l & \cdots & T_{l, l}^l \end{bmatrix}$

とすると generalized spherical function $T_{mn}^l(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$ は

$$\begin{cases} T_{mn}^l(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = e^{-im\varphi_1} P_{mn}^l(\cos\theta) e^{-in\varphi_2} \\ P_{mn}^l(\mu) = \frac{(-1)^{l-m} i^{n-m}}{2^l (l-m)!} \sqrt{\frac{(l-m)!(l+n)!}{(l+m)!(l-n)!}} (1-\mu)^{-\frac{n-m}{2}} (1+\mu)^{-\frac{n+m}{2}} \times \\ \times \frac{d^{l-n}}{d\mu^{l-n}} [(1-\mu)^{l-m} (1+\mu)^{l+m}] \end{cases}$$

と与えられる。

表現のユニタリ性より $\overline{T_{mn}^l(\varphi_1, \theta, \varphi_2)} = T_{nm}^l(\pi - \varphi_2, \theta, \pi - \varphi_1)$
 が成り立つ。又 Y_l^m と T_{mn}^l の間には

$$Y_l^n(\vartheta, \varphi) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \sqrt{\frac{2l+1}{2}} T_{0,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

の関係式が成り立つ。

更に G 上の関数 φ に対して, $(V_{g_0} \varphi)(g) = \varphi(gg_0)$ とおくと
 V_{g_0} は $L^2(G)$ (G 上の Haar measure $\frac{1}{8\pi^2} \sin\theta d\varphi_1 d\theta d\varphi_2$ に対する
 L_2 -space) に於ける G のユニタリ表現を与えるが, 此の表現は $(2l+1)$ 個の weight l の既約表現の直和の直和に分解する。

$l = 0, \frac{1}{2}, 1, \frac{3}{2}, \dots$ 。夫々の canonical basis は (normalization の後に)。

$\{T_{m,n}^l(\varphi_1, \theta, \varphi_2): -l \leq n \leq l\}$ で与えられる。normalization constant は $\frac{\sqrt{2l+1}}{4\pi}$ であり m, n に依存しない。この事は後に利用する。表現 V_g に対して

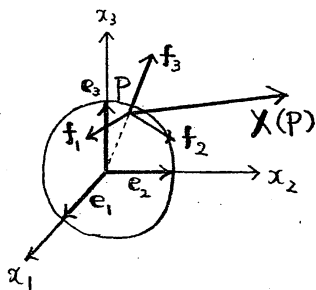
$$\begin{cases} H_{\pm} = e^{\mp i\varphi_2} \left(\pm \cot \theta \frac{\partial}{\partial \varphi_2} + \frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi_1} + i \frac{\partial}{\partial \theta} \right) \\ H_3 = i \frac{\partial}{\partial \varphi_2} \\ -H^2 = \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} + \cot \theta \frac{\partial}{\partial \theta} + \frac{1}{\sin^2 \theta} \left(\frac{\partial^2}{\partial \varphi_1^2} - 2 \cos \theta \frac{\partial^2}{\partial \varphi_1 \partial \varphi_2} + \frac{\partial^2}{\partial \varphi_2^2} \right) \end{cases}$$

である。

[VI] $\mathfrak{X}(E_3)|_{S^2}$ の分解

此の [VI] では E_3 の (複素) ベクトル場を単位球面に制限して得られる (ベクトル値) 関数で S^2 で二乗可積分ものの全体からなるヒルベルト空間 $L^2(S^2)$ の分解を行う。 $\varphi \in L^2(S^2), g \in G$ に対して $(U_g \varphi)(x) = g(\varphi(g^{-1}x))$ は G の $L^2(S^2)$ に於けるユニタリ表現を与える。

\mathfrak{X} を S^2 上の点 P を起点とする (x_1, x_2, x_3) に関する右手系の正規直交基底 $\{f_1, f_2, f_3\}$ で f_3 が S と直交するものの全体とする。



$\{f_1, f_2, f_3\}$ を起点 P が (x_1, x_2, x_3) 座標の原点と一致する様に平行移動すると \mathfrak{X} は E_3 の右手系正規直交基底の全体と同一視出来る。此の同一視の下で

考えれば G の作用に因して compatible な展開が得られる。

$\hat{X}_1(g)$ を展開するのには全 2 つの $T_{m,n}^l(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$ が必要ではない。その為に $P = g e_3$, $g = g(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$ の Euler 角と P の極座標 (ϑ, φ) の関係を調べる。

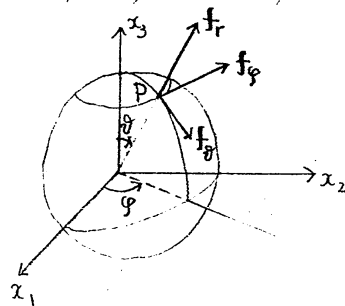
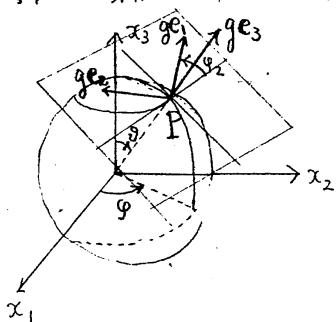
$P = g(\varphi_1, \theta, \varphi_2) e_3$ の $\{e_1, e_2, e_3\}$ に関する座標 $= T(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$ の方が

$$= \begin{pmatrix} \sin \varphi_1 \sin \theta \\ -\cos \varphi_1 \sin \theta \\ \cos \theta \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \sin \vartheta \cos \varphi \\ \sin \vartheta \sin \varphi \\ \cos \vartheta \end{pmatrix}$$

より $\varphi_1 = \frac{\pi}{2} + \varphi$, $\theta = \vartheta$ を得る。従って $f_r, f_\vartheta, f_\varphi$ を E_3 のハケットル場で各点 $P = (\vartheta, \varphi)$ (spherical coordinate) で夫々 r, ϑ, φ 方向の長さが 1 のハケットル場とすると、 $g = g(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$ ($\theta = \vartheta, \varphi_1 = \frac{\pi}{2} + \varphi_2$) とし

$$\begin{aligned} (g e_1, g e_2, g e_3) &= (f_\vartheta, f_\varphi, f_r) \begin{pmatrix} \cos(\frac{\pi}{2} + \varphi_2) & -\sin(\frac{\pi}{2} + \varphi_2) & 0 \\ \sin(\frac{\pi}{2} + \varphi_2) & \cos(\frac{\pi}{2} + \varphi_2) & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} \\ &= (f_\vartheta, f_\varphi, f_r) \begin{pmatrix} -\sin \varphi_2 & -\cos \varphi_2 & 0 \\ \cos \varphi_2 & -\sin \varphi_2 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

が成り立つ。何故なら $g(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = g_1 \circ g(\varphi_1, \theta, 0)$ (但し g_1 は $g e_3 = f_r$ を軸とする角度 φ_2 の回転とする) が成り立つ。



従って $X \in L^2(S^2)$ に対して $X = \sum_{i=1}^3 X_i g e_i = X_\vartheta f_\vartheta + X_\varphi f_\varphi + X_r f_r$

とおく。但し $g = g(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$, $\varphi_1 = \frac{\pi}{2} + \varphi$, $\theta = \vartheta$

$$(VI-1) \begin{cases} X_1 = -\sin \varphi_2 X_\vartheta + \cos \varphi_2 X_\varphi \\ X_2 = -\cos \varphi_2 X_\vartheta - \sin \varphi_2 X_\varphi \\ X_3 = X_r \end{cases}$$

が成り立つ。故に $X_\pm(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = X_1(\varphi_1, \theta, \varphi_2) \pm i X_2(\varphi_1, \theta, \varphi_2)$

とおく

$$(VI-2) \begin{cases} X_+(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = e^{-i\varphi_2} (-i X_\vartheta(\vartheta, \varphi) + X_\varphi(\vartheta, \varphi)) \\ \quad = e^{-i\varphi_2} (-i X_\vartheta(\theta, \varphi_1 - \frac{\pi}{2}) + X_\varphi(\theta, \varphi_1 - \frac{\pi}{2})) \\ X_-(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = e^{i\varphi_2} (i X_\vartheta(\vartheta, \varphi) + X_\varphi(\vartheta, \varphi)) \\ \quad = e^{i\varphi_2} (i X_\vartheta(\theta, \varphi_1 - \frac{\pi}{2}) + X_\varphi(\theta, \varphi_1 - \frac{\pi}{2})) \\ X_3(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = X_r(\vartheta, \varphi) \\ \quad = X_r(\theta, \varphi_1 - \frac{\pi}{2}) \end{cases}$$

が得られる。 $\hat{X}_\pm(g) = X_\pm(g^{-1})$ に対して (2)

$$(VI-3) \begin{cases} \hat{X}_+(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = X_+(\pi - \varphi_2, \theta, \pi - \varphi_1) = -e^{i\varphi_1} (-i X_\vartheta(\theta, \frac{\pi}{2} - \varphi_2) + X_\varphi(\theta, \frac{\pi}{2} - \varphi_2)) \\ \hat{X}_-(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = X_-(\pi - \varphi_2, \theta, \pi - \varphi_1) = -e^{-i\varphi_1} (i X_\vartheta(\theta, \frac{\pi}{2} - \varphi_2) + X_\varphi(\theta, \frac{\pi}{2} - \varphi_2)) \\ \hat{X}_3(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = X_3(\pi - \varphi_2, \theta, \pi - \varphi_1) = X_r(\theta, \frac{\pi}{2} - \varphi_2) \end{cases}$$

が得られる。此処で $T_{m,n}^\ell(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = e^{-im\varphi_1} P_{mn}^\ell(\cos \theta) e^{-in\varphi_2}$

を考慮すれば、次式の形の展開が出来る事が判る。

$$(VI-4) \begin{cases} \hat{X}_\pm(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = \sum_{\ell=1,2,\dots} \sum_{n=-\ell}^{\ell} a_{\pm,n}^\ell T_{\mp 1,n}^\ell(\varphi_1, \theta, \varphi_2) \\ \hat{X}_3(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = \sum_{\ell=0,1,2,\dots} \sum_{n=-\ell}^{\ell} a_{3,n}^\ell T_{0,n}^\ell(\varphi_1, \theta, \varphi_2) \end{cases}$$

(VI-3), (VI-4) で $\vartheta = \theta, \varphi = \frac{\pi}{2} - \vartheta_2$ とおくと

$$(VI-5) \quad \left\{ \begin{aligned} -iX_\vartheta(\vartheta, \varphi) + X_\varphi(\vartheta, \varphi) &= -e^{-i\varphi_1} \sum_{\ell} \sum_n a_{+,n}^{\ell} T_{-1,n}^{\ell}(\varphi_1, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \\ &= \sum_{\ell=1,2,\dots} \sum_{n=-\ell}^{\ell} b_{-,n}^{\ell} T_{-1,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \\ iX_\vartheta(\vartheta, \varphi) + X_\varphi(\vartheta, \varphi) &= -e^{i\varphi_1} \sum_{\ell} \sum_n a_{-,n}^{\ell} T_{+1,n}^{\ell}(\varphi_1, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \\ &= \sum_{\ell=1,2,\dots} \sum_{n=-\ell}^{\ell} b_{+,n}^{\ell} T_{+1,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \\ X_r(\vartheta, \varphi) &= \sum_{\ell=0,1,2,\dots} \sum_{n=-\ell}^{\ell} b_{r,n}^{\ell} Y_{\ell}^n(\vartheta, \varphi). \end{aligned} \right.$$

の形に展開出来ることが分る。但し最後の式で

$$Y_{\ell}^n(\vartheta, \varphi) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \sqrt{\frac{2\ell+1}{2}} T_{0,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \text{ を用いる。}$$

[VII] 線型化された Navier-Stokes 方程式の固有値問題

§ VII-1 線型化された Navier-Stokes 方程式

対称ポテンシャル流 $X^{(a)} = \alpha \operatorname{grad}(\frac{-1}{r})$ の安定性を調べる事は先に述べた様に、 $X^{(a)}$ のまわりの線型化された定常 Navier-Stokes 方程式の固有値問題

$$-\nu \Delta X - P[\nabla_{X^{(a)}} X + \nabla_X X^{(a)}] = \lambda X$$

の研究に帰着される。これは $L^2(\Omega)$ の分解に関する補題により次の境界値問題と同等である。

$$(BVP) \quad \left\{ \begin{aligned} \nu \Delta X - \nabla_{X^{(a)}} X - \nabla_X X^{(a)} + \operatorname{grad} p &= \lambda X, \operatorname{div} X = 0, X|_{\partial\Omega} = 0 \\ \text{for some scalar function } p &= p(x). \end{aligned} \right.$$

§ VIII-2. 種々の公式

[VI]の結果から今と同様に上の境界値問題(極座標 (r, ϑ, φ)) を用いた方が研究し易い。その為に (r, ϑ, φ) を用いて種々の公式を列挙しておく。

$X \in \mathfrak{X}(\Omega)$ に対し $X = X_r f_r + X_\vartheta f_\vartheta + X_\varphi f_\varphi$ とおく。

このとき

$$\begin{aligned} \Delta X = & \left\{ \Delta X_r - \frac{2}{r^2} X_r - \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \vartheta} (\sin \vartheta X_\vartheta) - \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial X_\varphi}{\partial \varphi} \right\} f_r \\ & + \left\{ \Delta X_\vartheta - \frac{1}{r^2 \sin^2 \vartheta} X_\vartheta + \frac{2}{r^2} \frac{\partial X_r}{\partial \vartheta} - \frac{2 \cos \vartheta}{r^2 \sin^2 \vartheta} \frac{\partial X_\varphi}{\partial \varphi} \right\} f_\vartheta \\ & + \left\{ \Delta X_\varphi - \frac{1}{r^2 \sin^2 \vartheta} X_\varphi + \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial X_r}{\partial \varphi} + \frac{2 \cos \vartheta}{r^2 \sin^2 \vartheta} \frac{\partial X_\vartheta}{\partial \varphi} \right\} f_\varphi \quad \text{である。} \end{aligned} \quad (\text{VII-1})$$

これに $A_r(X) f_r + A_\vartheta(X) f_\vartheta + A_\varphi(X) f_\varphi$ とおく。

但し関数に対し $(\Delta = \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 \frac{\partial}{\partial r}) + \frac{1}{r^2} \left\{ \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \vartheta} (\sin \vartheta \frac{\partial}{\partial \vartheta}) + \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} \right\})$ である。

又一般に $X, Y \in \mathfrak{X}(\Omega)$, $X = X_r f_r + X_\vartheta f_\vartheta + X_\varphi f_\varphi$, $Y = Y_r f_r + Y_\vartheta f_\vartheta + Y_\varphi f_\varphi$

に対し

$$\begin{aligned} (\text{VIII-2}) \quad \nabla_X Y = & \left(X(Y_r) - \frac{X_\vartheta Y_\vartheta}{r} - \frac{X_\varphi Y_\varphi}{r} \right) f_r \\ & + \left(X(Y_\vartheta) + \frac{X_\vartheta Y_r}{r} - \frac{X_\varphi Y_\varphi \cot \vartheta}{r} \right) f_\vartheta \\ & + \left(X(Y_\varphi) + \frac{X_\varphi Y_r}{r} + \frac{X_\varphi Y_\vartheta \cot \vartheta}{r} \right) f_\varphi \end{aligned}$$

である。但し $X(Y_r)$, ... はベクトル場 X を一次の斉次偏微分作用素と見做して, 即ち $X = X_r \frac{\partial}{\partial r} + \frac{X_\vartheta}{r} \frac{\partial}{\partial \vartheta} + \frac{X_\varphi}{r \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi}$ として

関数 f_r, \dots に作用させ f_r のである。特に我々の $X^{(1)} = \alpha \operatorname{grad}(\frac{1}{r})$ に対しては

$$(III-3) \quad \begin{cases} \nabla_{X^{(1)}} X = \frac{\alpha}{r^2} \frac{\partial X_r}{\partial r} f_r + \frac{\alpha}{r^2} \frac{\partial X_\theta}{\partial r} f_\theta + \frac{\alpha}{r^2} \frac{\partial X_\varphi}{\partial r} f_\varphi \\ \nabla_X X^{(1)} = -\frac{2\alpha}{r^3} X_r f_r + \frac{\alpha}{r^3} X_\theta f_\theta + \frac{\alpha}{r^3} X_\varphi f_\varphi \end{cases}$$

である。最後に

$$(VII-4) \quad \operatorname{grad} p = \frac{\partial p}{\partial r} f_r + \frac{1}{r} \frac{\partial p}{\partial \theta} f_\theta + \frac{1}{r \sin \theta} \frac{\partial p}{\partial \varphi} f_\varphi$$

$$(VII-5) \quad \operatorname{div} X = \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 X_r) + \frac{1}{r \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} (\sin \theta X_\theta) + \frac{1}{r \sin \theta} \frac{\partial X_\varphi}{\partial \varphi}$$

である。

§ VII-3 変数分離

取り扱うべき方程式は次の連立方程式である。

$$X \in \mathcal{X}(\Omega), \quad X = X_r f_r + X_\theta f_\theta + X_\varphi f_\varphi \quad (I)$$

$$(E_r) \quad \mathcal{A}_r(X) - (\nabla_{X^{(1)}} X + \nabla_X X^{(1)})_r + \operatorname{grad} p = \lambda X_r$$

$$(E_\theta) \quad \mathcal{A}_\theta(X) - (\nabla_{X^{(1)}} X + \nabla_X X^{(1)})_\theta + \frac{1}{r} \frac{\partial p}{\partial \theta} = \lambda X_\theta$$

$$(E_\varphi) \quad \mathcal{A}_\varphi(X) - (\nabla_{X^{(1)}} X + \nabla_X X^{(1)})_\varphi + \frac{1}{r \sin \theta} \frac{\partial p}{\partial \varphi} = \lambda X_\varphi$$

$$(E_\sigma) \quad \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 X_r) + \frac{1}{r \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} (\sin \theta X_\theta) + \frac{1}{r \sin \theta} \frac{\partial X_\varphi}{\partial \varphi} = 0$$

$$(E_\beta) \quad X_r|_{\partial\Omega} = X_\theta|_{\partial\Omega} = X_\varphi|_{\partial\Omega} = 0.$$

[Ⅶ]の結果は

$$X_{\pm} = X_{\varphi} \pm iX_{\vartheta}$$

と置くことと示唆しこいる。故にそうする。これに対応して

$$\Pi_{\pm} = \frac{1}{r \sin \vartheta} \frac{\partial p}{\partial \varphi} \pm i \frac{1}{r} \frac{\partial p}{\partial \vartheta}, \quad \Pi_r = \frac{\partial p}{\partial r}$$

とおく。

以下、方程式系 (E_r) - (E_φ) を $X_{\pm}, X_r, \Pi_{\pm}, \Pi_r$ を用いた方程式系に書き換える。

まず (E_φ) ± i(E_θ) を計算する。

$$\begin{aligned} & \mathcal{A}_{\varphi}(X) \pm i \mathcal{A}_{\vartheta}(X) \\ &= \left\{ \Delta X_{\varphi} - \frac{1}{r^2 \sin^2 \vartheta} X_{\varphi} + \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial X_r}{\partial \varphi} + \frac{2 \cos \vartheta}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial X_{\vartheta}}{\partial \varphi} \right\} \\ & \pm i \left\{ \Delta X_{\vartheta} - \frac{1}{r^2 \sin^2 \vartheta} X_{\vartheta} + \frac{2}{r^2} \frac{\partial X_r}{\partial \vartheta} - \frac{2 \cos \vartheta}{r^2 \sin^2 \vartheta} \frac{\partial X_{\varphi}}{\partial \varphi} \right\} \\ &= \Delta X_{\pm} - \frac{1}{r^2 \sin^2 \vartheta} X_{\pm} \mp i \frac{2 \cos \vartheta}{r^2 \sin^2 \vartheta} \frac{\partial X_{\pm}}{\partial \varphi} + \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial X_r}{\partial \varphi} \pm i \frac{2}{r^2} \frac{\partial X_r}{\partial \vartheta} \end{aligned}$$

故に

$$\mathcal{A}_{\varphi}(X) \pm i \mathcal{A}_{\vartheta}(X) = \left(\Delta - \frac{1}{r^2 \sin^2 \vartheta} \mp i \frac{2 \cot \vartheta}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) X_{\pm} + \frac{2}{r^2} \left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) X_r$$

$$\begin{aligned} \mathcal{A}_r(X) &= \Delta X_r - \frac{2}{r^2} X_r - \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \vartheta} (\sin \vartheta X_{\vartheta}) - \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial X_{\varphi}}{\partial \varphi} \\ &= \left(\Delta - \frac{2}{r^2} \right) X_r - \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \vartheta} \left(\sin \vartheta \cdot \frac{X_+ - X_-}{2i} \right) - \frac{2}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \frac{X_+ + X_-}{2} \\ &= \left(\Delta - \frac{2}{r^2} \right) X_r + i \frac{1}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \vartheta} \left\{ \sin \vartheta (X_+ - X_-) \right\} - \frac{1}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} (X_+ + X_-) \\ &= \left(\Delta - \frac{2}{r^2} \right) X_r - \frac{1}{r^2} \left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} - i \frac{\partial}{\partial \vartheta} - i \cot \vartheta \right) X_+ \\ & \quad - \frac{1}{r^2} \left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} + i \frac{\partial}{\partial \vartheta} + i \cot \vartheta \right) X_- \end{aligned}$$

故に

$$\begin{aligned} \Delta_r(X) = & \left(\Delta - \frac{2}{r^2} \right) X_r - \frac{1}{r^2} \left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} - i \frac{\partial}{\partial \vartheta} - i \cot \vartheta \right) X_+ \\ & - \frac{1}{r^2} \left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} + i \frac{\partial}{\partial \vartheta} + i \cot \vartheta \right) X_- \end{aligned}$$

— 2 —

$$\begin{aligned} & (\nabla_{X^{(k)}} X + \nabla_X X^{(k)})_\varphi \pm i (\nabla_{X^{(k)}} X + \nabla_X X^{(k)})_\vartheta \\ &= \left(\frac{\alpha}{r^2} \frac{\partial X_\varphi}{\partial r} + \frac{\alpha}{r^3} X_\varphi \right) \pm i \left(\frac{\alpha}{r^2} \frac{\partial X_\vartheta}{\partial r} + \frac{\alpha}{r^3} X_\vartheta \right) \\ &= \frac{\alpha}{r^2} \frac{\partial X_\pm}{\partial r} + \frac{\alpha}{r^3} X_\pm \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} & (\nabla_{X^{(k)}} X + \nabla_X X^{(k)})_\varphi \pm i (\nabla_{X^{(k)}} X + \nabla_X X^{(k)})_\vartheta = \alpha \left(\frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} + \frac{1}{r^3} \right) X_\pm \\ & (\nabla_{X^{(k)}} X + \nabla_X X^{(k)})_r = \alpha \left(\frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} - \frac{2}{r^3} \right) X_r \end{aligned}$$

最後に

$$\begin{aligned} (E_0) \quad 0 = \operatorname{div} X &= \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 X_r) + \frac{1}{r \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \vartheta} (\sin \vartheta X_\vartheta) + \frac{1}{r \sin \vartheta} \frac{\partial X_\varphi}{\partial \varphi} \\ &= \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 X_r) + \frac{1}{r \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \vartheta} \left(\sin \vartheta \frac{X_+ - X_-}{2i} \right) + \frac{1}{r \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \frac{X_+ + X_-}{2} \\ &= \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 X_r) - \frac{i}{2r} \left(\frac{\partial}{\partial \vartheta} + \cot \vartheta + i \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) X_+ \\ &\quad + \frac{i}{2r} \left(\frac{\partial}{\partial \vartheta} + \cot \vartheta - i \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) X_- \end{aligned}$$

故に方程式系 $(E_1) - (E_4)$ は次の方程式系と同値になる。

$$\begin{aligned}
 (E_{\pm}) & \left\{ \left(\Delta - \frac{1}{r^2 \sin^2 \vartheta} \mp i \frac{2 \cot \vartheta}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) X_{\pm} + \frac{2}{r^2} \left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) X_r \right\} \\
 & - \alpha \left(\frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} + \frac{1}{r^3} \right) X_{\pm} + \Pi_{\pm} = \lambda X_{\pm}
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 (E_r) & \left\{ \left(\Delta - \frac{2}{r^2} \right) X_r - \frac{1}{r^2} \left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} - i \frac{\partial}{\partial \vartheta} - i \cot \vartheta \right) X_+ \right. \\
 & \quad \left. - \frac{1}{r^2} \left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} + i \frac{\partial}{\partial \vartheta} + i \cot \vartheta \right) X_- \right\} \\
 & - \alpha \left(\frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} - \frac{2}{r^3} \right) X_r + \Pi_r = \lambda X_r
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 (E_{\sigma}) \quad & \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 X_r) - \frac{i}{2r} \left(\frac{\partial}{\partial \vartheta} + \cot \vartheta + i \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) X_+ \\
 & + \frac{i}{2r} \left(\frac{\partial}{\partial \vartheta} + \cot \vartheta - i \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) X_- = 0
 \end{aligned}$$

$$(E_{\rho}) \quad X_{\pm} \Big|_{\partial \Omega} = X_r \Big|_{\partial \Omega} = 0.$$

よって [VI] の結果より X_{\pm}, X_r は

$$X_{\pm}(r, \vartheta, \varphi) = \sum_{\ell=1}^{\infty} f_{\pm}^{\ell}(r) \sum_{n=-\ell}^{\ell} T_{\pm 1, n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$X_r(r, \vartheta, \varphi) = \sum_{\ell=0}^{\infty} f_0^{\ell}(r) \sum_{n=-\ell}^{\ell} T_{0, n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi).$$

の形に展開出来る。 $p = p(r, \vartheta, \varphi)$ は

$$p(r, \vartheta, \varphi) = \sum_{\ell=0}^{\infty} p^{\ell}(r) \sum_{n=-\ell}^{\ell} Y_{\ell}^n(\vartheta, \varphi) = \sum_{\ell=0}^{\infty} p^{\ell}(r) \sum_{n=-\ell}^{\ell} T_{0, n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

の形に展開出来る。

$$\begin{cases} X_{\pm}(r, \vartheta, \varphi) = f_{\pm}^{\ell}(r) T_{\pm 1, n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \\ X_r(r, \vartheta, \varphi) = f_r^{\ell}(r) T_{0, n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \\ p(r, \vartheta, \varphi) = p^{\ell}(r) T_{0, n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \end{cases}$$

とおいて $(E_{\pm}), (E_r), (E_{\theta})$ に代入して $T_{m, n}^{\ell}$ の項を消去し次の式
 であるが、この時次の事に注意する。即ち $\{T_{m, n}^{\ell}(\varphi_1, \theta, \varphi_2); -l \leq n \leq l\}$
 は $L^2(G)$ に於ける G のユニタリ表現 $(V_g f)(g) = f(gg_0)$ の
 の weight ℓ の既約成分の表現空間の基底をなしてあり、 ℓ の
 みに依存する normalization constant を乗じてその canonical basis
 となる。故に H_{\pm}, H_3, H^2 等が作用させると $T_{m, n}^{\ell}$ は canonical
 basis と同じ関係式を満足す。この事を用いて問題の reduction
 に必要な recurrence formula を導く。

G 上のユニタリ表現 $(V_g f)(g) = f(gg_0)$ に対しては

$$\begin{cases} H_{\pm} = e^{\mp i \varphi_2} \left(\pm \cot \theta \frac{\partial}{\partial \varphi_2} \mp \frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi_1} + i \frac{\partial}{\partial \theta} \right) \\ H_3 = i \frac{\partial}{\partial \varphi_2} \\ -H^2 = \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} + \cot \theta \frac{\partial}{\partial \theta} + \frac{1}{\sin^2 \theta} \left(\frac{\partial^2}{\partial \varphi_1^2} - 2 \cos \theta \frac{\partial^2}{\partial \varphi_1 \partial \varphi_2} + \frac{\partial^2}{\partial \varphi_2^2} \right) \end{cases}$$

である。又 $T_{m, n}^{\ell}(\varphi_1, \theta, \varphi_2) = T_{n, m}^{\ell}(\pi - \varphi_2, \theta, \pi - \varphi_1)$ である。

また

$$\begin{aligned} & \left(\frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i \frac{\partial}{\partial \theta} \right) T_{0, n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) = \overline{\left(\frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i \frac{\partial}{\partial \theta} \right) T_{n, 0}^{\ell}(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi)} \\ & = \overline{\left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \mp i \frac{\partial}{\partial \theta} \right) T_{n, 0}^{\ell}(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, 0)} \\ & = \mp e^{\mp i \pi} \overline{\left(e^{\mp i \pi} \left(\pm \cot \theta \frac{\partial}{\partial \varphi_2} \mp \frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi_1} + i \frac{\partial}{\partial \theta} \right) T_{n, 0}^{\ell} \right) (\varphi + \frac{\pi}{2}, \vartheta, \pi)} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \pm (H_{\pm} T_{n,0}^{\ell})(\varphi + \frac{\pi}{2}, \vartheta, \pi) = \pm \alpha_1^{\ell} T_{n,\pm 1}^{\ell}(\varphi + \frac{\pi}{2}, \vartheta, \pi) \\
&= \pm \sqrt{\ell(\ell+1)} T_{\pm 1,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi).
\end{aligned}$$

故有

$$\left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i' \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{0,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) = \pm \sqrt{\ell(\ell+1)} T_{\pm 1,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi).$$

又

$$\begin{aligned}
&\left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \mp i' \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{\pm 1,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) = \left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \mp i' \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) \overline{T_{n,\pm 1}^{\ell}(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi)} \\
&= \overline{\left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i' \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{n,\pm 1}^{\ell}(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi)} \\
&= \pm \left(\left(\mp \cot \vartheta \frac{\partial}{\partial \varphi_2} \pm \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi_1} + i' \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{\pm 1,n}^{\ell}(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi) + \left(\cot \vartheta \frac{\partial T_{n,\pm 1}^{\ell}}{\partial \varphi_2} \right)(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi) \right) \\
&= \pm \left\{ e^{\mp i' \varphi_2} \left[e^{\pm i' \varphi_2} \left(\mp \cot \vartheta \frac{\partial}{\partial \varphi_2} \pm \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi_1} + i' \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{n,\pm 1}^{\ell} \right] \right\} (\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi) \\
&\quad + \cot \vartheta \frac{\partial T_{n,\pm 1}^{\ell}}{\partial \varphi_2} (\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi) \\
&= \pm e^{\pm i' \pi_2} (H_{\mp} T_{n,\pm 1}^{\ell})(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi) + (-i') \cot \vartheta (H_3 T_{n,\pm 1}^{\ell})(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi) \\
&= \mp \sqrt{\ell(\ell+1)} T_{n,0}^{\ell}(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi) + i' (\pm) \cot \vartheta T_{n,\pm 1}^{\ell}(\frac{\pi}{2} + \varphi, \vartheta, \pi) \\
&= \mp \sqrt{\ell(\ell+1)} T_{0,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \pm i' \cot \vartheta T_{\pm 1,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi).
\end{aligned}$$

故有

$$\left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \mp i' \frac{\partial}{\partial \vartheta} \mp i' \cot \vartheta \right) T_{\pm 1,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) = \mp \sqrt{\ell(\ell+1)} T_{0,n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$\text{又由 } -H^2 T_{m,n}^l = -l(l+1) T_{m,n}^l \quad \text{及}$$

$$\begin{aligned} -l(l+1) T_{m,n}^l(\varphi_1, \theta, \varphi_2) &= \left\{ \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} + \cot \theta \frac{\partial}{\partial \theta} + \frac{1}{\sin^2 \theta} \left(\frac{\partial^2}{\partial \varphi_1^2} - 2 \cos \theta \frac{\partial^2}{\partial \varphi_1 \partial \varphi_2} + \frac{\partial^2}{\partial \varphi_2^2} \right) \right\} T_{m,n}^l \\ &= \left(\frac{\partial^2}{\partial \theta^2} + \cot \theta \frac{\partial}{\partial \theta} \right) T_{m,n}^l + \frac{1}{\sin^2 \theta} \left(-m^2 T_{m,n}^l + 2im \cos \theta \frac{\partial T_{m,n}^l}{\partial \varphi_2} + \frac{\partial^2 T_{m,n}^l}{\partial \varphi_2^2} \right) \end{aligned}$$

$$\therefore -l(l+1) T_{m,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) = \left(\frac{\partial^2}{\partial \vartheta^2} + \cot \vartheta \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{m,n}^l$$

$$+ \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \left\{ -m^2 T_{m,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) - 2im \cos \vartheta \frac{\partial}{\partial \varphi} T_{m,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) + \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} T_{m,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \right\}$$

$$\text{故由 } m = +1, -1, 0 \text{ 讨论。}$$

$$\left(\frac{\partial^2}{\partial \vartheta^2} + \cot \vartheta \frac{\partial}{\partial \vartheta} + \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} - i \frac{2 \cos \vartheta}{\sin^2 \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} - \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \right) T_{+1,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$= -l(l+1) T_{+1,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$\left(\frac{\partial^2}{\partial \vartheta^2} + \cot \vartheta \frac{\partial}{\partial \vartheta} + \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} + i \frac{2 \cos \vartheta}{\sin^2 \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} - \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \right) T_{-1,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$= -l(l+1) T_{-1,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$\left(\frac{\partial^2}{\partial \vartheta^2} + \cot \vartheta \frac{\partial}{\partial \vartheta} + \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} \right) T_{0,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$= -l(l+1) T_{0,n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$\text{次に } X_{\pm}(r, \vartheta, \varphi) = f_{\pm}^{\ell}(r) T_{\pm 1, n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$X_r(r, \vartheta, \varphi) = f_0^{\ell}(r) T_{0, n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$$p(r, \vartheta, \varphi) = p^{\ell}(r) T_{0, n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi)$$

$\varepsilon(\varepsilon_{\pm}), (\varepsilon_r), (\varepsilon_{\sigma})$ に対して $\lambda \neq 0$.

先ず $\varepsilon(\varepsilon_{\pm})$ について $\lambda \neq 0$.

$$\begin{aligned} \Pi_{\pm} &= \Pi_{\varphi} \pm i \Pi_{\vartheta} = \frac{1}{r \sin \vartheta} \frac{\partial p}{\partial \varphi} \pm i \frac{1}{r} \frac{\partial}{\partial \vartheta} \\ &= p^{\ell}(r) \frac{1}{r} \left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{0, n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi) \\ &= p^{\ell}(r) \frac{1}{r} (\pm 1) \sqrt{\ell(\ell+1)} T_{\pm 1, n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi). \end{aligned}$$

即ち

$$\Pi_{\pm} = \pm p^{\ell}(r) \frac{\sqrt{\ell(\ell+1)}}{r} T_{\pm 1, n}^{\ell}(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi).$$

次に $\varepsilon_r, \varepsilon_{\sigma}$ に対して $\lambda \neq 0$. $X_{\pm}, X_r, p \in \varepsilon(\varepsilon_{\pm})$ に対して $\lambda \neq 0$.

$$\lambda f_{\pm}^{\ell} T_{\pm 1, n}^{\ell} = \lambda X_{\pm}$$

$$= \nu \left\{ \left(\Delta - \frac{1}{r^2 \sin^2 \vartheta} \mp i \frac{2 \cot \vartheta}{r^2 \sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) f_{\pm}^{\ell} T_{\pm 1, n}^{\ell} + \frac{2}{r^2} \left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) f_0^{\ell} T_{0, n}^{\ell} \right\}$$

$$- \alpha \left(\frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} + \frac{1}{r^3} \right) f_{\pm}^{\ell} T_{\pm 1, n}^{\ell} + \Pi_{\pm}$$

$$\begin{aligned} &= \nu \left\{ \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{df_{\pm}^{\ell}}{dr} \right) T_{\pm 1, n}^{\ell} + f_{\pm}^{\ell} \frac{1}{r^2} \left(\frac{\partial^2}{\partial \vartheta^2} + \cot \vartheta \frac{\partial}{\partial \vartheta} + \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} \mp i \frac{2 \cot \vartheta}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} - \frac{1}{\sin^2 \vartheta} \right) T_{\pm 1, n}^{\ell} \right. \\ &\quad \left. + f_0^{\ell} \frac{2}{r^2} \left(\frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \pm i \frac{\partial}{\partial \vartheta} \right) T_{0, n}^{\ell} \right\} - \alpha \left(\frac{1}{r^2} \frac{df_{\pm}^{\ell}}{dr} + \frac{1}{r^3} f_{\pm}^{\ell} \right) T_{\pm 1, n}^{\ell} \\ &\quad \pm \frac{\sqrt{\ell(\ell+1)}}{r} p^{\ell} T_{\pm 1, n}^{\ell} \end{aligned}$$

$$= \nu \left\{ \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{df_{\pm}^{\ell}}{dr} \right) T_{\pm 1, n}^{\ell} - \frac{\ell(\ell+1)}{r^2} f_{\pm}^{\ell} T_{\pm 1, n}^{\ell} \pm \frac{2\sqrt{\ell(\ell+1)}}{r^2} f_0^{\ell} T_{\pm 1, n}^{\ell} \right\} \\ - \alpha \left(\frac{1}{r^2} \frac{df_{\pm}^{\ell}}{dr} + \frac{1}{r^3} f_{\pm}^{\ell} \right) T_{\pm 1, n}^{\ell} \pm \frac{\sqrt{\ell(\ell+1)}}{r} p^{\ell} T_{\pm 1, n}^{\ell}$$

故に $f_{\pm}^{\ell}, f_0^{\ell}, p^{\ell}$ の満たすべき方程式は

$$(D_{\pm}) \quad \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{df_{\pm}^{\ell}}{dr} \right) - \frac{\ell(\ell+1)}{r^2} f_{\pm}^{\ell} \pm \frac{2\sqrt{\ell(\ell+1)}}{r^2} f_0^{\ell} \\ - \alpha \left(\frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} + \frac{1}{r^3} \right) f_{\pm}^{\ell} \pm \frac{\sqrt{\ell(\ell+1)}}{r} p^{\ell} = \lambda f_{\pm}^{\ell}$$

次に (E_r) について (2)

$$\lambda f_0^{\ell} T_{0, n}^{\ell} = \lambda X_r \\ = \nu \left\{ \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} \left(r^2 \frac{\partial X_r}{\partial r} \right) + \frac{1}{r^2} \left(\frac{\partial^2}{\partial \theta^2} + \cot \theta \frac{\partial}{\partial \theta} + \frac{1}{\sin^2 \theta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} \right) X_r \right. \\ \left. - \frac{1}{r^2} \left(\frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi} - i \frac{\partial}{\partial \theta} - i \cot \theta \right) X_+ \right. \\ \left. - \frac{1}{r^2} \left(\frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi} + i \frac{\partial}{\partial \theta} + i \cot \theta \right) X_- \right\} \\ - \alpha \left(\frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} - \frac{2}{r^3} \right) X_r + \Pi_r \\ = \nu \left\{ \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{df_0^{\ell}}{dr} \right) T_{0, n}^{\ell} + \frac{f_0^{\ell}}{r^2} (-\ell(\ell+1)) T_{0, n}^{\ell} \right. \\ \left. + \frac{f_+^{\ell}}{r^2} \sqrt{\ell(\ell+1)} T_{0, n}^{\ell} - \frac{f_-^{\ell}}{r^2} \sqrt{\ell(\ell+1)} T_{0, n}^{\ell} \right. \\ \left. - \alpha \left(\frac{1}{r^2} \frac{df_0^{\ell}}{dr} - \frac{2}{r^3} f_0^{\ell} \right) T_{0, n}^{\ell} + \frac{df_0^{\ell}}{dr} T_{0, n}^{\ell} \right.$$

故に

$$(D_r) \nu \left\{ \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{df_0^\ell}{dr} \right) - \frac{\ell(\ell+1)}{r^2} f_0^\ell + \frac{\sqrt{\ell(\ell+1)}}{r^2} (f_+^\ell - f_-^\ell) \right\} \\ - \alpha \left(\frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} - \frac{2}{r^3} \right) f_0^\ell + \frac{dp^\ell}{dr} = \lambda f_0^\ell$$

(E₀) より

$$0 = \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} (r^2 f_0^\ell T_{0,n}^\ell) - i \frac{f_+^\ell}{2r} \left(\frac{\partial}{\partial \vartheta} + \cot \vartheta + i \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) T_{+1,n}^\ell \\ + i \frac{f_-^\ell}{2r} \left(\frac{\partial}{\partial \vartheta} + \cot \vartheta - i \frac{1}{\sin \vartheta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) T_{-1,n}^\ell \\ = \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{df_0^\ell}{dr} \right) T_{0,n}^\ell - \frac{f_+^\ell}{2r} \sqrt{\ell(\ell+1)} T_{0,n}^\ell + \frac{f_-^\ell}{2r} \sqrt{\ell(\ell+1)} T_{0,n}^\ell$$

故に

$$(D_0) \quad \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} (r^2 f_0^\ell) - \frac{\sqrt{\ell(\ell+1)}}{2r} (f_+^\ell - f_-^\ell) = 0$$

[VII] 固有値問題

次に常微分方程式系 $(D_\pm), (D_r), (D_0)$ に対する境界値問題の固有値問題を調べる。系は $f_\pm^\ell \rightarrow f_\pm, f_0^\ell \rightarrow f_0, p^\ell \rightarrow p$ と略記し、

$$(D_\pm) \nu \left\{ \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{df_\pm}{dr} \right) - \frac{\ell(\ell+1)}{r^2} f_\pm \pm \frac{2\sqrt{\ell(\ell+1)}}{r^2} f_0 \right\} \\ - \alpha \left(\frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} + \frac{1}{r^3} \right) f_\pm \pm \frac{\sqrt{\ell(\ell+1)}}{r} p = \lambda f_\pm$$

$$(D_r) \nu \left\{ \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{df_0}{dr} \right) - \frac{\ell(\ell+1)}{r^2} f_0 + \frac{\sqrt{\ell(\ell+1)}}{r^2} (f_+ - f_-) \right\} \\ - \alpha \left(\frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} - \frac{2}{r^3} \right) f_0 + \frac{dp}{dr} = \lambda f_0$$

$$(D_0) \quad \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} (r^2 f_0) - \frac{\sqrt{\ell(\ell+1)}}{2r} (f_+ - f_-) = 0$$

$$(D_\beta) \quad f_\pm(r_i) = f_0(r_i) = 0, \quad (i=1, 2).$$

$$(\ell = 1, 2, \dots)$$

である。 (D_ρ) より $f_+ - f_-$ を各 $(D_\pm), (D_r)$ に代入し f を消去すれば f_0 に対する四階の常微分作用素に対する境界値問題を解るが、非常に複雑な為筆者は未だこの問題を解く事に成功していない。 此処では部分的な結果を報告する。

$f_0 \equiv 0$ とするものに限る。 可なり (D_0) より $f_+ - f_- = 0$ と得る。 又 (D_r) より $f = c$ (constant) と得るが、 $f = f_+ = f_-$ とし (D_\pm) より

$$\pm \frac{\sqrt{\ell(\ell+1)}}{r} f = \lambda f - \nu \left\{ \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{df}{dr} \right) - \frac{\ell(\ell+1)}{r^2} f \right\} + \alpha \left(\frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} + \frac{1}{r^3} \right) f$$

従って $f \equiv 0$ と得る。 従って結局 $(\nu=1$ と可なり)

$$(BVP)_2 \begin{cases} \frac{d^2 f}{dr^2} + \left(\frac{2}{r} - \frac{\alpha}{r^2} \right) \frac{df}{dr} - \left(\frac{\ell(\ell+1)}{r^2} + \frac{\alpha}{r^3} \right) f = \lambda f, \\ f(r_i) = 0, \quad i=1, 2. \end{cases}$$

此処で f' の項を消去する為 $f(r) = a_\alpha(r) g(r)$, $a_\alpha(r) = \frac{1}{r} e^{-\frac{\alpha}{2r}}$ とおく。

$$(BVP)_2 \text{ は } \begin{cases} g''(r) + Q_\alpha(r) g(r) = \lambda g(r) \\ g(r_i) = 0, \quad i=1, 2 \end{cases}$$

となる。 但し $Q_\alpha(r) = \frac{1}{a_\alpha(r)} \left\{ a_\alpha''(r) + \left(\frac{2}{r} - \frac{\alpha}{r^2} \right) a_\alpha'(r) - \frac{\ell(\ell+1)}{r^2} - \frac{\alpha}{r^3} \right\}$ とする。

この固有値問題の最大固有値 λ_{max} は

$$\lambda_{max} = \sup \left\{ - \int_{r_1}^{r_2} |g'(r)|^2 dr + \int_{r_1}^{r_2} Q_\alpha(r) |g(r)|^2 dr \right\}$$

但し, \sup は $g \in C^2([r_1, r_2])$, $g(r_i) = 0$, $i=1, 2$
 $\int_{r_1}^{r_2} |g(r)|^2 dr = 1$ となる g に対してである。

更に

$$\lambda_{\max} \geq \sup \left(- \int_{r_1}^{r_2} |g'(r)|^2 dr \right) + \min_{r_1 \leq r \leq r_2} Q_\alpha(r) \int_{r_1}^{r_2} |g(r)|^2 dr$$

$$= \sup \left(- \int_{r_1}^{r_2} |g'(r)|^2 dr \right) + \min_{r_1 \leq r \leq r_2} Q_\alpha(r)$$

$$= - \left(\frac{\pi}{r_2 - r_1} \right)^2 + \min_{r_1 \leq r \leq r_2} Q_\alpha(r)$$

$$\therefore \lambda_{\max} \geq - \left(\frac{\pi}{r_2 - r_1} \right)^2 + \min_{r_2 \leq r \leq r_2} \left\{ \left(\frac{1}{4r^5} + \frac{1}{2r^4} \right) \alpha^2 - \left(\frac{1}{2r^4} + \frac{9}{2r^3} \right) \alpha + \frac{4 - l(l+1)}{r^2} \right\}$$

となる。 $Q_\alpha(r)$ の形から分かるように $l_0 \geq 1$ に対して,
 上式の右辺 > 0 ならば, 任意の $l_0 \geq l \geq 1$ に対しても成り
 立つ。 かつ各 l に対して多重度が $2l+1$ あることになり。

$\sum_{l=1}^{l_0} (2l+1) = l_0(l_0+2)$ に注意すると, 次の結果を得る。

[VIII] 結果

ある $l_0 \geq 1$ に対して

$$\min_{r_1 \leq r \leq r_2} \left\{ \left(\frac{1}{4r^5} + \frac{1}{2r^4} \right) \alpha^2 - \left(\frac{1}{2r^4} + \frac{9}{2r^3} \right) \alpha + \frac{4 - l_0(l_0+1)}{r^2} \right\} > \left(\frac{\pi}{r_2 - r_1} \right)^2$$

が成り立つならば、対応する対称ボウシヤル流 $X^{(n)}$ は

少くとも $l_0(l_0+2)$ 次元の instability subspace を持つ。

此の instability subspace は $X = X_r e_r + X_\vartheta e_\vartheta + X_\varphi e_\varphi$

$$X_\pm = X_\varphi \pm i X_\vartheta \quad \text{と} \quad (2)$$

$$X_r = 0, \quad X_\pm = f_n^l(r) T_{\pm 1, n}^l(0, \vartheta, \frac{\pi}{2} - \varphi), \quad 1 \leq l \leq l_0, \quad -l \leq n \leq l$$

の形のベクトル場が張る l_0 の集合。